

高齢者の眼の病気（8）：外科治療について（その1）

高齢者の網膜疾患では、外科治療（手術）が必要になる疾患も多いです。通常、高齢者の手術適応疾患としては白内障が有名です。白内障は基本的には手術によって治療可能ですが、網膜疾患の場合、手術によって回復するもの、あまりよくなるものもあります。網膜疾患の手術を施行する前に、理解しておいてもらいたいことは、現時点で痛んだ網膜組織を取り替えることはできないということです。

高齢者で手術治療が適応となる網膜疾患の特徴は、『硝子体』というゼリー状の組織が水のように変化していることが多いということです。硝子体が水のように変化（液化）した結果、後部硝子体剥離と呼ばれる、硝子体が網膜からからはなれるという現象が起きます。ところが、硝子体は網膜のいろいろな所に癒着を生じているため、後部硝子体剥離と同時に、網膜組織をひっぱり網膜に穴があいてしまいます。この穴のことを『網膜裂孔』と呼びます。また網膜に存在する血管をひっぱった場合には血管が破綻して硝子体内に出血を起こします。これを『硝子体出血』と呼びます。

従って、中高年のかたが、突然『蚊のようなものがたくさん見えるようになった』『視野の一部が突然暗くなった』『視野の周辺に光がたくさんはしる』という症状を自覚されたときは要注意です。あまり時間をおかず、眼科を受診しましょう。これらの症状はすべて後部硝子体剥離という硝子体の加齢による変化でおきる現象です。

『網膜裂孔』を長期に放置すると、これは網膜剥離という状態に進行する可能性が高いです。若年者のかたの網膜裂孔は放置しても、網膜剥離にいたるスピードは遅いことが多いのですが、中高年のかたの場合は急速に進行することがあります。この場合、胞状といって丁度、壁紙が上から剥がれ落ちるように、網膜が全部剥がれてしまいます。黄斑部が剥離すると急速に視力が低下します。この場合、患者さんは『急に真っ暗になって見えなくなりました』と言って眼科を受診されます。

『網膜裂孔』に対しては、レーザーによる網膜光凝固術が有効となります。網膜の穴の周りを丁寧に軽いやけどをつくり、網膜剥離にならないようにするという訳です。

もしも、網膜剥離に進行した場合には、速やかな外科手術が必要になります。硝子体出血に関しても、同様です。少量の出血の場合は、経過をみますが、大量の出血の場合は、すみやかな手術が必要になります。

網膜剥離、硝子体出血も、初期に『蚊のようなものがたくさん見えるようになった』、つまり飛蚊症という症状がほぼ必発です。日ごろ、視野に蚊のようなものが2、3個飛んでいるという方は多いと思いますが、もし急に数が増えた場合には上記のような疾患の可能性があります。

次回は網膜の手術治療について説明します。